

強度行動障害者が提起する問題行動への介入効果 —就労継続支援B型事業所におけるコンサルテーション事例— Intervention effect on severe challenging behavior —Consultation case in a Type B support facility—

久留宮なぎ砂 (OT)

特定医療法人 共和会 共和病院医療技術部リハビリテーション課

Key words: コンサルテーション, 問題行動, 介入, (強度行動障害)

【はじめに】精神科が母体の当院では、法人外の障害者福祉施設からコンサルテーションの依頼を受ける。施設に出向くと作業療法士の介入が必要とすることが少なくない。今回、粗暴行為により支援者が脅威を感じやすく関わりが最小限になり、陰性感情が強まる支援者からのコンサルテーションを担当した。この実践経験から、障害特性についての説明や医療的介入の助言、感覚特性に配慮した活動の提案といった支援の可能性について考察したい。発表に際し、当院の倫理委員会で許可は得ている（承認番号2024-016）。

【事例A】知的発達症、自閉スペクトラム症（ASD）、強度行動障害判定基準32点の20代男性。身の回り動作は促しを要した。入眠は25時以降で、自宅から就労継続支援B型事業所に来所するとトイレに籠っていた。仕事は丁寧だが生産量は気分によって左右された。

【経過】大声、自傷、他害が頻回に認められ、主治医に連絡するよう支援者に提案した。Y月不穏時に抗精神薬が処方されたが、担当者は投薬行為に戸惑っていたため投薬のタイミングについて助言した。効果は一時的だった。Y+14月、関係者会議で入眠時間の修正を目指した。それにより、入眠時間を早める家族の意識変容は芽生えたが、目標達成はできなかった。他害は週1～2回あり、頓服は週1回使用した。SP感覚プロフィール結果は、全象限で高い～非常に高く、因子スコアは情動的反応72、耐久性の低さ34、低登録23と非常に高い数値を示した。Y+17月、振動板（STYLISHJAPAN VSSS1657、モード1、7分間×2/日）の支援を提案した。導入当初Aは抵抗を示し担当者が躊躇するも、管理者の助言により14日後習慣化した。

【結果】振動板が習慣化すると他害と頓服は月1回に減少した。異常行動チェックリスト（ABC-J）は興奮性40から21、無気力20から11、常同行動10から8、多動25から10、不適切な言語11から7に減少した。腕に内出血痕のある支援者はなくなった。

【考察】Person (P) -Environment (E) -Occupation (O) モデルで振り返ると、Aは睡眠障害と体性感覚処理障害由来の不快感を自傷・他害行動で表出する（P）。入眠時間の修正は困難（E）なため、情動・行動面の安定をもたらし、簡便で統一した介入ができる作業（O）の検討が課題である。そこで、寡動なASD者に親和性があり¹⁾情動・行動面の安定が期待できる²⁾振動板を提案する。それは個別の配慮を大切にする施設の支援（E）となり、気分変動や攻撃性の緩和、対人交流の修復、感覚探求行動の軽減、落ち着き、大声の緩和に影響した（P）とABC-Jの変化から推察される。本事例は、日本作業療法士協会の第4次作業療法5カ年戦略（2023-2027）にある地域共生社会の構築³⁾に寄与するものと考えられる。

【引用文献】

- 1) Amy Allnutt, Sara Pappa and Michael Nordvall : The Feasibility Whole-Body Vibration as an Approach to Improve Health in Autistic Adults. Disabilities, 4, pp429-443, 2024.
- 2) Bressel E, Gibbons MW, Samaha A : Effect of whole body vibration on stereotypy of young children with autism. BMJ Case Reports, 19 Apr 2011 : bcr0220113834 <https://doi.org/10.1136/bcr.2011.3834> 2024. 12. 3 access.
- 3) 香山明美 : 「第4次作業療法5カ年戦略（2023-2027）」. 日本作業療法士協会誌131 : 6-33, 2023.